

(1) さぬきのこんぴらさん



うみ かみさま ほんぐう
海の神様こんぴらさんの本宮



むかし もんぜんまち ことひらちょう
昔からにぎわう門前町「琴平町」
(琴平町文化会館 模型)

ことひらちょうにある「象頭山」の中腹には、うみ かみさまとして古くから全国的に有名な「こんぴらさん」(金刀比羅宮)があります。

ほんぐうへと続く長い石段の両側には、土産物店が軒を並べ、ぜんこくからの年間350万人を超える観光客や修学旅行生でにぎわっています。ちょう内には、多くの旅館やホテルが立ち並び、近年、「四国こんぴら歌舞伎大芝居」が復活し、温泉が見つかったり、近くにテーマパークができたりして、さらに観光客が増えています。

1 昔のものを手がかりにこんぴら参りについて調べよう

● 探してみよう

こんぴら参りに関係している昔のものは、県内外のいろいろなどころに残っています。みなさんの町にもあるかもしれませんね。



1 今に残る昔のもの調べ



みちしるべ



しょうてんがい なか とりい
商店街の中の鳥居



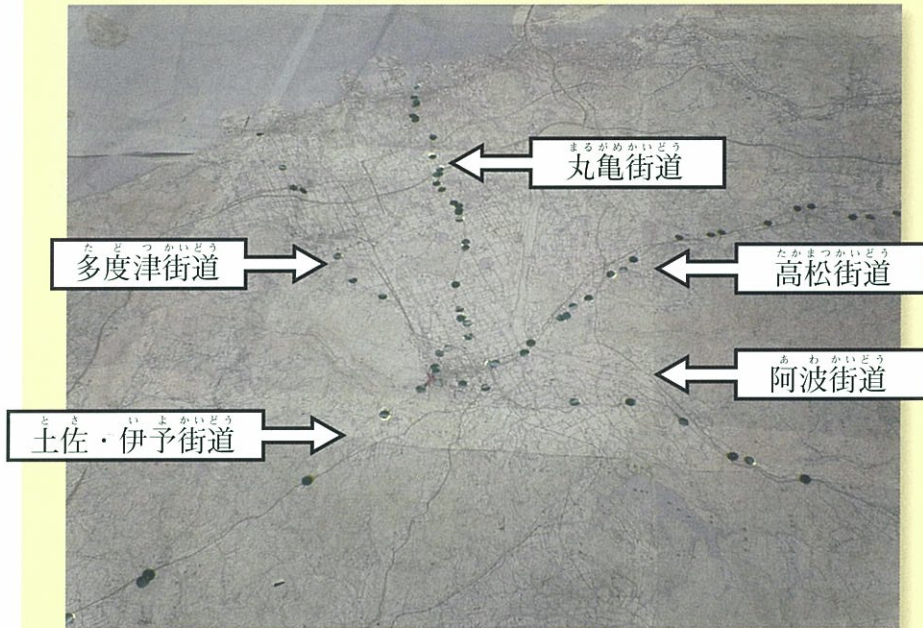
ことひらちょうにあったちょうせき
こんぴら街道にあった丁石

現在、県内に残っているこんぴら参りに関係している灯ろう、とりい、みち、ちょうせきだけでも300あまりあります。

これらは、むかし、昔のこんぴら参りになくてはならないものでした。

2 昔のものが残っているところ

道するべや鳥居，丁石など，昔のものは，どんなところに残っているのでしょうか。地図に位置づけてみると，昔の人が通っていた5本の道が見えてきました。



こんびら灯ろう、丁石、鳥居のちらばり
(金刀比羅宮社務所発行金毘羅庶民信仰資料集第2巻参照)

ある歩いてみよう

この5つの道は、「こんびら五街道」と呼ばれています。みなさんも、江戸時代の人になったつもりで、こんびらさんを目指して、歩いてみませんか。毎年、4月29日「みどりの日」には、五街道を歩く健脚大会が開かれています。



3 灯ろうを調べよう

五街道の終点，琴平町の入り口には，たくさんの並び灯ろうがあります。温かい明かりが旅人たちを迎えてくれました。灯ろうをくわしく調べるといろいろなことが分かります。



土佐・伊予街道の並び灯ろう



多度津街道の並び灯ろう

しら調べよう

みなさんも、地域に残る古いものを地図に位置づけてみよう。何か新しい発見があるかもしれませんよ。

II 見つけようふるさとのすばらしさ



丸亀港にある太助
灯籠は、江戸にあっ
たこんぴら講1,357名
の寄付によって建て
られたものです。多い時
で、3,800人の人が3,555
両ものお金を寄付し、
丸亀の港を改修したこ
ともあったそうです。

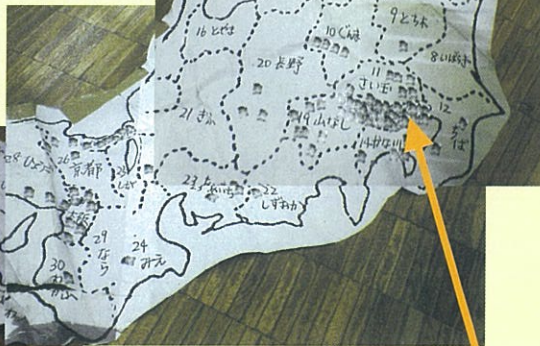
江戸（東京）や土州
（高知県）から、寄進さ
れた灯ろうが多いね。



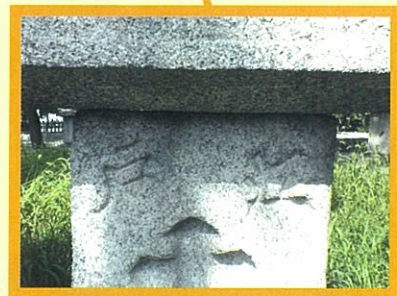
こんぴら参りに来る人たちは、どこから来ていたのでしょうか。
手がかりは灯ろうにあります。灯ろうには、寄進した人の
出身地が書いてあるのです。「江戸」と書いているのは、今の
東京の人が琴平町にお参りに来て灯ろうを建てたということに
なります。並び灯ろうに書いてある地名を日本地図に位置づけ
てみました。



北海道とかいてある灯ろう
（丸亀街道）



土州とかいた灯ろう（土佐街道）



江戸とかいてある灯ろう（丸亀街道）



遠く北海道に住む人が、自分を使うわけでもないのに、灯
ろうを建てたのはどうしてかな。昔の人の気持ちになって考
えてみましょう。

2 こんぴら参りの様子や気持ちを想像しよう

1 日本全国の人に愛されているこんぴらさん



おおさか から ことひら までの 昔の 地図 (金刀比羅宮蔵)
大阪から琴平までの昔の地図 (金刀比羅宮蔵)

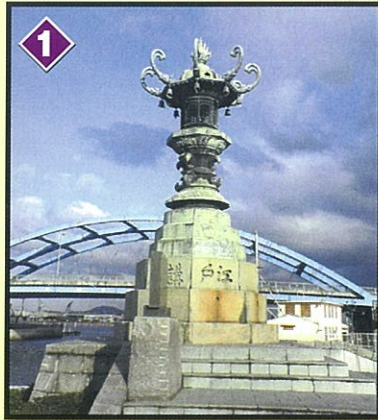
車も電気もない時代、こんぴら参りの旅はどんなものだったのでしょうか。

故郷を遠く離れ、見知らぬ真つ暗な道を道するべや灯ろうを手がかりに、何日もかけてこんぴらさんを目指して歩いていきます。橋のない川を渡り、いくつもの山を越え、大変な苦勞をしつつも、日照りや洪水の心配や重い年貢を忘れ、道々の景色を眺め、旅を楽しんでいたことでしょう。



こんぴら船 (小西嘉純作)

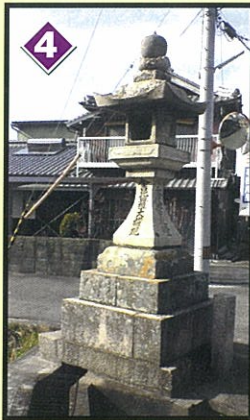
瀬戸内海をわたる船は、大阪から出ていたようです。大阪からの船は、丸亀港、多度津港に着きました。大阪から丸亀まではおよそ 200 km で、約 8 日間の旅でした。船の上では、「こんぴら船々」を歌いおどりました。



1

【丸亀太助灯ろう】

丸亀港に着いた人たちは、高松の明かりを目指して約15kmの道のりをこんびら五街道「丸亀街道」を歩きました。



4

琴平町内に入っても、呼びとめる宿の人の動作にも情ちよ豊かなものがあり、宿の主人のていねいなもてなしに、気軽に話を楽しんだようです。二度目にここに足をとめた人は、必ず行きつけの宿を探していったようです。無事お参りをすませた人たちは、お返しに灯ろうを寄進したので、道はますます明るくなったと言われています。お参りに来る人たちのために、五街道沿いの村の人たちが寄付をつのって灯ろうを建てたり休憩所を作ったりした話は、いろいろなところに残っています。



2

街道を通りながら、手入れのゆきとどいた田畑、白かべのへい、つくり松のある農家、そこここにあるため池などの景色を楽しみました。



3

【与北茶堂の跡】

村人が馬を引いて旅人を運んだり、湯茶の接待所をつくってもてなしをしたりしました。与北村にはこんびら街道で最も大きな茶屋がもうけられ、お参りをする人たちの休けい所として喜ばれました。高松街道では、円座や滝宮が休けい所や宿泊地として栄えました。



(金刀比羅宮蔵)

【安藤広重画「見返り坂」】

これは、江戸時代の絵です。こんびらさんをお参りした人が何度も何度もふり返り、名残りを惜んでいる様子が描かれています。「もう、帰らなければならない、残念だ。」という思いから「残念坂」とも呼ばれました。

【流し樽】

こんびらさんが海の神様なので、「流し樽」といって、沖を通る船から樽の中に賽銭を入れて海に流し、岸で拾った人に届けてもらうしくみなどもありました。なんともどかな風習ですが、当時のこんびら信仰の深さをはかり知ることができます。



(金刀比羅宮蔵)



【 5 高灯ろう 】

琴平町にある木でできた高さ 27.6 m の灯ろうです。1860 年、多くの人の寄付で建てられました。かつては、6 km はなれた丸亀沖のこんぴら船まで明かりを届けました。こんぴら参りに来る人は、この明かりを目指して歩きました。何日もかけてやっと、こんぴらに着いた人たちは、高灯ろうの明かりを見た時、どんな気持ちだったことでしょう。

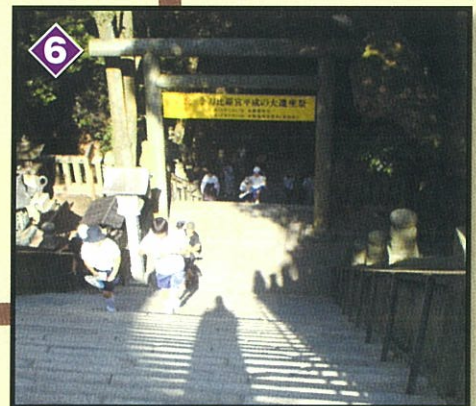


本宮からは、讃岐富士の美しい姿や讃岐平野をながめ、瀬戸内海に浮かぶ島々の景色を見て、旅の楽しさを十分に味わったことでしょう。そして、お参りの後はこんぴら大芝居、西国きっての役者さんの舞台を楽しみました。



【 さや 鞘 橋 】

琴平町内を流れる金倉川にかけられた全国でも珍しい屋根のあるアーチ型の橋です。昔は、こんぴらさんにのぼる石段の手前にかけていました。長さは 23 m、幅 4.5 m。江戸時代には、この上で商いをしていました。現在では、年 3 回行われるこんぴらさんの祭典の時のみ使用されています。



金倉川で身を清め、珍しい屋根のついた橋「鞘橋」をわたり、785 段の石段を一段一段登っていきました。



ことひらぐうぞう (金刀比羅宮蔵)

【 こんぴら 犬 】

こんぴら参りがしたくてもできない人々は、「こんぴら講」といって、仲間どうしでお金を積み立て、くじで代表を決めたり、「こんぴら犬」といって、飼い犬をお参りする人に旅費とお賽銭を預けて自分の代わりにお参りさせたりしました。こんぴら参りに来る人の大半はこうした代参でした。



【 こんぴらさんのある象頭山 】(高松街道から)

この山は、象にたとえられて、「象頭山」と呼ばれています。象の目にあたるのが、こんぴらさんの「旭社」です。耳の位置にあるのが、「奥社」です。